

15

文体論研究

第 21 号

1974年12月

明治の文体革命……………山 本 正 秀……1

シンポジウム：文体論の可能性

 I. 文体と文体研究……………森 晴 秀……18

 II. 文体論研究の動向……………豊 田 昌 倫……24

 III. 小説の文体とディケンズ……………竹 内 章……35

 IV. 新言語的アプローチ……………笥 寿 雄……48

ハウスマンの詩用語について……………竹 内 豊……61

日本文体論協会

文体論の可能性

第24回大会シンポジウム（1973年11月25日於神戸大学）の記録

（司会） 森 晴 秀
豊 田 昌 倫
竹 内 章
寛 寿 雄

I. 文体と文体研究

森 晴 秀

本協会々長東田千秋教授から、この大会のためにシンポジウムを企画するよう依頼を受けた。この種のシンポジウムは過去にいくつかの例もあり、また種々の問題提起もすでになされてきているので、ここでは1960年頃から現在に到る約10年間の動向を先ず紹介し、次いで、型どおりに言語学と文学の両面から、当面の中心問題へと論を進める方式をとりたい。扱う対象は英語圏に限った。日本、ドイツ、フランスその他の国々の事情については、次回以後、それぞれの領域の方々の研究に委ねたい。

先ず豊田氏に過去約10年間における文体に関する研究を詳細に検討して頂く。1960年という年代を設定した理由は、それ以前の動向はすでに1958年にインディアナ大学で開かれたシンポジウムの記録（Thomas A. Sebeok ed., *Style in Language*. MIT Press & J. Wiley, 1960）に詳しい報告があるからである。竹内氏には、Dickensを中心としたヴィクトリア朝の散文作品の文体研究という純粋に文学研究の立場から発言して頂き、寛氏には、構造理論、変形理論、生成理論といった、アメリカの新しい言語学の方法論によって、具体的に文学作品の分析をお願いする。

こういった両端から、中心にある文体という共通テーマに向かって論を進めるわけであるが、その過程で、議論のかみ合うところ、かみ合わぬところが明らかにされよう。恐らくはかみ合わぬところの方が多いであろう。

上に触れたインディアナのシンポジウムに対して、SpitzerやAuerbachのようなすぐれた学者たちの名前が全然出てこなかった、この会合は全く下らぬものだ、という手厳しい批判をRené Wellek教授は下したが、我われのシンポジウムに対しても同種の批判はあるであろう。しかし、かえってそれ以上のご叱正を頂きたいというのが、われわれのひそかな願いでもある。

さて、言語に関する欧米の諸家の関心は、当然ギリシヤ、ローマ以来、時代を超えて今日まで、広範囲な言語文化圏にまたがっている。特に方法論の上からも、地域と時代によってかなりの相違が認められる。とりわけ今世紀に入ってからは、フランスを中心とした言語理論の研究を始めとして、アメリカの新しい言語学の発達に到る過程の中には、百人百様の方法があるともいえよう。それらの中少くとも基本的な立場と思えるものを二・三、次にしるしておく。

先ず一般的に考えられるのは、文体論を文学研究と言語研究の中間に位置する座標としてとらえる立場である。その中間のどの位置に文体研究という仕事を置くかということ自体についても問題があろう。純粋に言語学の領域からいわゆる「文体」を論じる場合、その文体を認識せしめる最小単位、或いは言語学から他の領域へ移る境界線の設定と文体認識との関係。更にはそれが文学の枠組み、例えばひとつの完結した作品を考える場合、その作品全体あるいは作者の文体というマクロの世界からみた最小単位として認知可能な文体的単位。その最小単位の累積によって拡大された場合、「文体」ということばによってとらえうるのはどの範囲までかという問題、等々。これらのいずれの場合をとっても、「文体」の定義が異なるのは申すまでもない。

文学という領域自体の中でも、竹内氏から発表されるように、例えば小説というジャンルの文体、歴史的にみた場合の、特定の時代の文体というように、対象は拡大する。

言語学の立場においても、ある地域や国の言語的特質の記述といった共時的研究、歴史的な観点からの通時的研究、ひいては比較言語学的な研究といったように、立場はさまざまである。

もうひとつの文体に関する考え方は、言語現象そのものをコミュニケーションの一手段としてとらえる立場である。言語現象を含めた人間の意識的、無意識的な言動の基本構造、人間精神の様式や文化現象一般の内的構造の研究、例えば最近の E. T. Hall のいわゆる“Silent Language”や、フランス語の“écriture”といったことばによって指示される内容一般、等へと拡がってゆく。これらのことから、いわば個人、地域、時代によって、あるいは世界観の相違によってさえも、扱う対象と研究の方法が異なるともいえそうである。

このシンポジウムでも、従って、これらの方法論や見解等の一致点、不一致点を先ず提出することを考えたが、その効果には疑問がある。豊田氏から紹介があるとおり、文体や文体論に関しては、イギリス本国でさえも最近は多くの書物が出ており、例えば G. Hough の *Style and Stylistics* (1968) などは、その問題に対する適切な解説を含んでいる。また、わが国においても、この方面の資料は豊富になりつつあるからである。われわれが対象をイギリス、アメリカにおける1960年代以降の動向とした主な理由はそこにある。

次に方法論的に重要な二・三の点について触れておかねばならない。I. A. Richards や W. Empson 等に端を発した「新批評」も、日本の場合は、常に本国から一定年限の遅れはあるが、すでに定着を始めていると思われる。また、伝統的な文献学にしても、その勢力が衰えたとはいえない。更には本協会第24回の個人発表にも一・二みられたように、純粋に言語学の領域の人たちによる Chomsky 以来の新しい理論に立脚した研究が文学作品にまでその分野を拡げつつある。特にアメリカの場合、変形文法的方法は大学一年生用の英語、英文法のテキストにも採用され、各章の

終りに練習問題を設けたものが数種類出版されている事情をみても明らかである。これはかつて、新批評の理論に基づいた教科書が多数出版されたのと軌を一にしている。しかし一方で、変形理論に対しては、当初から一部に批判があったのは確かであるが、詳細は豊田、寛両氏に委ねたい。

その他に、統計学やコンピューターの採用による研究も数多い。これらの手段が研究方法を考案したのではないにしても、研究時間の節減には役立っているようである。例えば Wilhelm Fucks に“Possibilities of Exact Style Analysis”(J. Strella ed., *Patterns of Literary Style*. Penn. State Univ., 1971 に集録) という論文がある。彼は縦軸に単語の長さ(シラブルの数)、横軸に文の長さ(文中の語数)という座標を定めて、現代を中心とした作家たちの文章を分析した。その中で、例えば、文が短かく、しかも単語が短かいというゼロ座標に最も近いところには当然 E. Hemingway が位置している。もっとも、このような数理的な処理を経なくても、読者はある程度までは正確に単語や文の長短は感じ取るのではないか、またこれらの処理と作品や作家の理解との関係はどうか、等の疑問は残るが、これらは少くとも最近の傾向のひとつである。

上の例は、むしろ外面的に判断の可能な現象である。一方で文章の内的構造に関していえば、例えば R. Ohmann は、“Generative Grammars and the Concept of Literary Style”(Word, Vol. XX, 1964) の中で、H. James を例にとり、従属節の文中における位置を調べた。彼はそのような節が文頭に位置する場合、文中の場合、文尾の場合を、それぞれ左枝分れ、右枝分れ、自己埋め込み、等の用語でもって説明しようと試みた。確かにこの尺度は、作者の発想法の型を調べ、それを分類する方法のひとつとしては便利であろうが、彼はどのような思考法あるいは着想の過程によって、文体的差異を認め、この方法を編み出したのか、また作者の全存在とこのような方法によって明らかにされる作者の文体的傾向との間に、どのような相関関係が認められるのであるか、これらは私が最も知りたい

と思ういくつかの問題である。

Ohmann の曖昧な点は、多くの伝統的な文体研究方法がそうであるように、文章の意味内容や全体的印象に対する未練を捨て切れないでいることに一因があるとも思われる。それに反して、例えば「文体とは文章の内容から切り離して考えることが出来る外形的なものである。」とする樺島忠夫氏のように（「表現の解剖」三省堂、昭43.）、文体を純粋に数理的な研究の対象としてとられる研究者も多くある。同氏は例えば「作者不明作品の作者を推定する法」（「文体論研究」No.6, 1965）において、名詞の比率、MVR、指示詞の比率、その他約10項目からなる尺度を設定し、既存の作品の分析を通じて得られた各種のデータを基に、作者不明の作品を推定する方法を考案した。この方法は日本文学を対象としたものとしては、恐らく初めての科学的に正確なものとして高く評価されよう。但し、司会者にとって疑問な点としては、そのようにして指摘されるある作者の文体的特質が、果して彼の文体の総体でありうるのか、また、このような操作を通じて得られたデータと、彼の、例えば世界観なりその作品の主題等との間に、何らの有機的關係も認め得ぬものか、そして最後に、文章の内容と形式を切り離すのであれば、分析の対象をなぜ文学の言語に限定するのか、等が挙げられる。

さて上にみたように、文体の分析方法は実に多種多様である。その中で、ひとつ確実にいえることは、科学としての言語学は分析に重点をおき、一方で文学研究は総合に重点をおく、ということであろう。私はここで、問題提起者のひとりとして、お笑い草までに、次のような比喩を提出してみたい。それは植物に関する比喩である。例えば樹木の形態の分類は、植物学者によれば、恐らく次のようになるであろう。先ず葉が問題となる。葉脈の形状は平行脈が網状脈か。葉の形は線形か、へら形か、卵形か。次いで葉の先や基部の形、縁の形。色はどうか。有毛か無毛か。裏は白いか。葉の出方は対生か互生か。また枝や幹との関係。その幹は松のよう

な直幹か、夾竹桃のように株から多くが立ち上がる、いわゆる株立ちか、藤のようなつる状か。などが客観的な尺度となる筈だ。更にはその樹木が育生している土壌や、気候、地域等といった、地質学や気象学等も、研究対象となるであろう。

要するに科学的な研究対象としての樹木そのものには「価値」は関わりはない。しかし一方で、造園という立場からは、同じ樹木でも直ちにその美的な価値が問題となる。同じ枝でもその出方や枝先までの形状、幹においてはその太さや曲がり具合、葉の繁茂の仕方、根の張り方、といった樹木全体の、直覚的に美しいと思うことの出来る要素が、例えば一本の松の値段を決定するであろう。ついでながらその値段の決定は、一購入者の個人的趣味によらずに、その道の専門家である業者によって、時代的、地域的な趣好という全体的要件や、伝統的で月並みな在来種か、あるいは同じ種でも珍種であるとかいった要素によってなされるものであることをつけ加えておきたい。

ところで、植物の形態学の研究には園芸や造園学上の知識は必ずしも必要ではない。その逆に、たとえ趣味としての園芸にも、樹木や草花に関する基礎的知識は必須である。もっとも、優れた庭師は、経験と直観によって植物に関するすべてを知るのであろうし、植物学者自身も直観によって、園芸や造園の奥義を体得しうる可能性は充分にある。しかし、園芸が科学としての植物学から学ぶところは、植物学が前者から学ぶところよりは、多少とも多いのではないかと思われる。

以上はもちろん、素人の感想に過ぎず、上の植物に関する比喩も、必ずしも正確に私の意図を満たすものとは考えないが、少なくとも言語学と文学研究の相互関係については、これをよく表わしているように考える。言語学はひとつの自律的な学問として他に頼るところなく独立しうる可能性があるのに反し、文学研究は、例えば専門用語の発生源を考えても、文学以外の領域、例えば、音楽、絵画、彫刻、哲学、倫理学、そして最近では

数学，等に依存することが非常に多い。

ただし，昨今は特に言語学分野でも，高度な数学や倫理学の援用が認められる。こうした文学と言語学との境界領域に位置する数学や倫理学といった学問と，文体研究の方法論とが重なるという現象や，上に挙げた諸々の分野相互間を結ぶ新しい学問領域の開発が近年になって初めてその重要性を増したことなどを考える時，文体の研究に関する方法論的な可能性は，なお将来に秘められているということは出来る。

このあたりで初心に戻り，次に二人の先人のことばを思い出しておきたい。一人は Leo Spitzer である。彼によれば，文体の研究は単なる補助的な学問である。批評体系とか学問体系の構築に腐心するよりは，文学作品をそれ自体としてとらえる。真理としての芸術作品の姿を把握すれば，文体研究はその存在理由を失うであろう，というのである。もう一方で René Wellek は，文学の分析は言語学的分析が終了時点で始まる。言語的な分析の危険性は，言語の規範からの逸脱や曲折に焦点を定めることにあるが，時折最も平凡で，しかも最も正常な言語的現象が，文学作品の構成に参加することがある，という意味の，非常に示唆に富んだ発言をしている。恐らくこれらの発言は，文体の研究に関わるいずれの学派にとっても，常に反省の資料となるものであろう。

おわりに，紙面の制約から詳細に亘って触れることは出来ないが，討論の過程で，河原重清氏を始め多くの方々から適切な助言を頂くことが出来たことを報告し，感謝のしるしとしたい。